Ｔグループと霊性教育

一緒に食卓につかれたとき、パンを取り、祝福してさき、
彼等に渡しておられるうちに、
彼等の目が開けて、それがイエスであることがわかった。
すると、み姿が見えなくなった。彼等は互いに言った、
「道々お話しになったとき、また聖書を説き明かしてくださったとき、
お互いの心が内に燃えたではないか」
エマオの道で、復活のイエスと出会った二人：
（ルカによる福音書24章32節）

まどか　庸　代（南山短期大学講師）

序：霊性を育む時代と人間関係トレーニング

Ⅰ　Ｔグループにみる生命論

Ⅱ　Ｔグループにみる知識論・学問論の変革

Ⅲ　Ｔグループのもつ人間性教育、宗教や神秘体験との関係つくり（教育論）

Ⅳ　Ｔグループ、及び体験学習にみる神学・科学・社会構造の発想転換（神学論）超越神から内在神へ

この小論は、いわゆる「科学的」論述ではない。非科学的である。「科学的」方法を取らないからとはいえ、学究目的をもつ小論である。人間の真理を探求するという意味では、あくまでも現代人の学問・自己探求・人間解放を探求する為の論考である。

現時点での、人間性実現のための活動の一端と、Ｔグループの宗教性・精神性を私なりに把握し、議論の視点を掲げてみたい。日本人のたましい教育・精神性錬成のために、この草稿についてご示唆いただければ幸いである。

序：霊性を育む時代と人間関係トレーニング

時代を読む、とか、人の心を読む、ということがある。これは、人が気持ちよく生活し、次の行動を起こす手掛かりともなる。また、「読みが当たれば」事を円滑もしくは躍動的に推進させる。あいだをよむ、とか、行間をよむと言い換えてみると、これは、自分と他者との関わりを大切に生きるとか、現代から未来への変化過程に気付きながら自己決定していくことの大切さを思い立たせてくれる。

だから、年の初めや事の初めに、一言、時代の読みに触れる。

追い付け追い越せ時代、物の時代、高度成長時代、不確定性時代、低成長時代、という経済力重視の時代把握と平行して、留意されつつも実感とならないのが「心の時代」であろう。前者は時代描写であり、その時代に起こっている現象をとらえている表現だが、後者の「心の時代」とは時代目標であり、未だ実現しないからこそいわれているのである。

私が今年特に声を大にして強調しておきたい時代描写は「霊性時代の到来」である。そして、個性化の進んだ今、時代目標は「関わりの時代」である。知か信か、物か心か、聖か俗か、善か悪か、男か女か、老か若か、強か弱か、という対極的なものの考え方は、ＹＥＳかＮＯかをせまる科学万能主義時代には通用したかもしれないし、正解を一つにして、国家・組織統合をめざす時期には必要であろう。

しかし、その時代段階をすぎたものにとってはどうか。その時代に満たされていなかった人間の一面が、機能し始め、成長のためのシステム造りが社会風潮として、或は現代人のための現代人による教育の試みとして着手されているのではないか。超（科学）能力や霊の尊重、人の気持ちや心という主体中心の論理がもっと重要視されるのではないか。

日本は、科学・技術先進国という科学万能主義教育体制、世俗化大衆一般化重視のひとつくり社会体制を取っている。人に判って貰えるように、とか、人と同じ様に目立たないようにという〝横の目の利いた〟人間関係が得意である。そこで用心されるべきものは、少数にして、特定の思想・信条による教育であろう。例えば、宗教教育等は、宗派教育とみなされ教育行政の中では最も軽視されてきた。多くの人々が、宗教と名のつくものを極度に避け、忌み嫌う傾向は現代では世代を問わない。

特定の宗派に属さなくとも、信仰心の深い人は日本にはたくさんいる。むしろこれが日本人の特徴である。80％仏教80％神道80％宗教なし１％キリスト教と答える国民、すなわち、お宮参りで誕生や成人式や結婚を祝い、お寺さんで墓参や死を悼む一生を過ごすことの出来る国民なので、日本人の宗教観は曖昧に見える。

しかし一方で、この特性を大いに生かして「信仰心の育成、宗教心の確信と

保証、霊性の錬磨」を行うことは、日本人の人間性や心をみたしつつ進める教育制度に、不可欠であると思う。

その意味で、大学・短大のカリキュラムとして位置づけた本学人間関係に於ける「Ｔグループ・人間関係トレーニング」を日本人の信仰心や霊性育成のフィールドの一つとして把握でき得ることを提言したい。

Ⅰ　Ｔグループにみる生命論

「Ｔグループとは」という定義や解説は、ここでは触れない。むして、Ｔグループ体験を通して経験した「グループのダイナミズムとは何か」また、Ｔグループにおいて、個と個の出会いにとどまらず、「グループ生命体と出会っているという現実体験の示唆しているものは何か」という点について考察をすすめる。

私自身のＴ体験は1986年夏、SMILE*（大阪）主催のヒューマンリレーションズLab.ラボラトリーという研修プログラム（５泊６日合宿）がはじめてであった。Ｔグループは通常はトレーナー１名、コトレーナー１名のスタッフに対して、メンバー10名前後からなる。私は初回はメンバーとして参加した。以降毎年秋、南山短期大学人間関係科の人間関係トレーニングという短大生対象の教育プログラム（５泊６日合宿形式）には、トレーナーと連携ワークをするという意味ではスタッフでもあり、人間関係科共同体の一教員という意味では学生と一緒にメンバーでもある、という二重の立場での参加を続けている。

ＴグループはTraining グループの略称通り、トレーニングを目的としたグループであり、５泊６日の間に、一グループとしての成長を見ることができるであろう。その一例として、私の体験したあるＴグループの成長をそのメンバー同士で確認し合えるような素朴な形でデータ化してみた（Fig.１）。

これは、Ｔセッション初回T_1から最終回T_{15}まで、毎回各メンバーが「振り返り用紙」に書き止どめた「グループ」の形容を手掛かりとした。最後に全員で毎回の自分の気持ちを出来るだけ忠実に思い出しながら、座標の象限に書き映したものである。

→　１期：懸念が強い…「今ここで」の自分を伝え始める…心を開く実感…
　　２期：人との触れ合い…信頼関係…グループ存在の実感…
　　３期：グループとの触れ合い…信頼・受容・安心・共生…人生存在の実感
　　創世期：人生との触れ合い…人としての喜び・悲哀感・限界・感謝等の共感……神秘的体験・霊性との触れ合い…
　　新１期へ：自己開示していない自分への不安・取り残されているような孤独感……懸念が生まれる

対人関係の間で生まれる。グループやダイナミズムの時間は関わりの成熟やグループ成長の推進力をもたらす。生命的な触れ合い、暖かみを身体で感知したり、表現するメンバーもいる。私もその体験をもった者の一人である。

Tグループの成長曲線もしくはグループの歴史（プロセス）を概観し、そのグループで起こっている事柄の波をTグループの life line としてとらえてみた（Fig. 1 の波線部分）。

わずか5日間、T15回の出会い、全体セッション45時間、ほぼ初対面同志だった人々が一つのグループ体験、信頼・不信体験、対立・和解体験、様々な人生に於ける関係体験をする。私が特に着目したいのは、グループ後期に生ずる段階「人生との触れ合い」と名称した部分である。暖かい誰とはいえないグループそのものとの関わりの瞬間がある。そのベースとなる人間同志の知己、関わり合う中で見せ合う（もしくは表れてくる）感情体験の積み重ね等など、時間を共に互いに過ごしたという、共通かつ具体的な歴史を経て、信頼関係がつくられ、互いが開かれていく。そして、信頼は、個人の困難さを共に乗り越えたというグループ共有の体験を重ねるうちに、人生への信頼や自信を体得する人もいる。人を通して人生に触れる以上、出合いと別れ、関係を切るという関わり、孤立感、離説、放浪、帰還もグループ内で再び生ずる。

また、人生の呼吸・栄枯盛衰のような波がみられる。その様なグループ生長の中で、グループメンバーは「関わりから創生された」内的な生命との関わりの瞬間を、同時に感じたり、意識せずとも共に安らぎとして表現している。

Tグループの中で見られるこの「生きた何か」は、非常に人間的でありながら、内的な満足に通じる「出会い」「触れ合い」の本質的なものである。

私はこれを、グループ（＝人間関係）の諸段階（＝人生）における「生命創世期」と称し、ここに、Tグループと宗教性教育との繋がりをみる。

このように、Tグループのライフサイクルをとらえてみると、Tグループの中で生ずる「グループ生命体」から「暖かい何ものかとの触れ合い」に至る体験は、その時空間は非日常的であっても、その体験は現実であり、Tグループ統べての営みはどの瞬間も現実であるということが理解できる。日常の人間関係からだけでなく、非日常の関わりを通して見えてくる現実存在がある。それは、自分自身であったり、他者であったり、人間性そのものにふれる局限状態であったり、神とよばれるものにふれる祈り（信仰）の状態であったりする。

この現実の人間で生まれている霊性に触れている体験こそその人にとって、宗教性を磨いている瞬間であり、宗教教育を関わりから学び合っている瞬間なのである。「生活の全てが祈りになる」とはミシエル・コストのことばだが、人間関係トレーニングを人間の宗教性・霊性尊重の立場から手掛ける者にとっては、「人間関係から神の創造のわざは生まれうる」ということばを残したい。

Ⅱ　Ｔグループにみる知識論・学問論の変革

教育や研究の方法としては、「科学的」方法と「非科学的」方法がある。近代的方法は前者とされ、多くの近代主義日本人は、科学的に知識を得るよう教育されてきた。では「科学的」と「非科学的」の違いは何か。

デカルトの「方法論序説」は方近代自然科学の発想を方向付けた。

論理中心の知識は科学的、体験中心の知識は非科学的と見なされやすい。それは何故か。但し、ここでは「科学的」ということが万能にして優位・正統であるという、通念は除く。

Ｔグループは体験学習プログラムの一つであり、その教育方法上の特徴は、教科理論中心からの学びではなく、体験中心からの学びへの教育・研究発想転換にある。*

「今、ここで、起こっていることが学習の素材です」ということを、トレーナーまたはコトレーナーは伝え、Ｔグループが開始される。*

Ｔの集中トレーニング５日間終了後、日常生活に戻り、例えば、家庭・学校・職場に戻り、Ｔグループ内で起こったことや、体験を語り伝えることにほとんど全員が難しさを感じる。伝えたとしても非常に表面的な、極一部の現象しか語れず、行った本人も「いわないほうがまし」ということになる。精神的体験・霊的体験・死をも含む神秘体験をわかち合うときに経験する難しさでもある。

つまり、「今ここで here and now」*体験したことを素材にして出会った「関わりの妙味」を、後で「あのときあそこで there and then」という過去の時間空間では再現不可能なのである。

体験、グループ体験・神秘体験・宗教体験は、語り継がれてはいるが、本人がまったく同じ事を再現して他者に伝えることは出来ない。しかし、他者も自分の体験においては同形ではないが同質の何かを体験することは出来る。その共有できうる同質部分こそ言語化して「体験の論理」とし、「学習・研究」出来る部分であろう。つまり、Ｔグループをはじめとする体験学習においても、体験「今ここで関わる」という環境が確保されたとき、「人間の本質・本性」として共通性・再現性ある何ものかに出会う。

Ｔグループは、本質・本性という、human nature すなわち人間性・人間の自然・人らしさというテーマに触れていくのであるから、自然科学的方法であれ、宗教的方法であれ、人の本質としての共通性・再現性は常にある。体験学習においても、関わりの中で起こる様々な経験は非常に個別的・主観的であるが、それを通して出会っていく「人の本質」はあくまで共感可能な一体的・客観的なものである。逆に、人の本性に触れたとき宗教性や科学的事柄もそこに内在している。

「知識」「識別」価値判断・行動規範・選択・実行に至る、人の「学びの営み」あるいは、人の叡智・知の営みとしての「自己探求」「人間探求」は、時

代に応じて、宗教制度や科学制度によって担われてきた。いわゆる（自然）科学の時代が学問・政策上今日主流であるが、科学万能に走ることは、人の自然探索上、中庸の道でないのではないか。宗教制度にいきる、すなわち宗教を職業使命とする人や、科学制度にいきる、すなわち科学を職業とする人をのぞく多くの人々は、制度化された方法だけに囚われず自由に、むしろ未だ開発されていない「人間探求の方法を探るパイオニア」として自分（達）自身の人間性を知っていくことこそ、人の知識の発展、国の学問の発達に関与していることになる。

Ｔグループは、宗教教育だけでなく、また科学的知識教育だけでなく、人の関わりという生活現場（フィールド）に内在する人間性（自己）の意識化教育ともいえる。また、それは人間性を知っていく広い意味での「知識」教育であり、サイエンスではあるが、狭義の学問には位置つけ難い。では、Ｔグループは、知識論、学問論として、何が新しい点なのか。それは、人間関係からの人間体験という、人間を中心に位置づけた、聖化に対して世俗化、いや、聖か俗かという二極化に対して〝ポスト世俗化〟の知識観・学問観を呈している点である。

フィールド体験中心の学問は、実験室中心の科学同様、そこで起こる現象に内在する自然の本性にきづく人（研究主体者）によっては本性が誤釈される危険もある。そのため、グループメンバーの複数の視点やコミュニケーションが、自己把握、他者受容には重要な助けとなる。

Ⅲ　「宗教教育とＴグループ」

霊性・宗教性・神秘性は、知性・感性等と並んで人の能力として育ちうる。

Ｔグルー内で、メンバーが霊性に触れている様に見受けられる瞬間や人生の人生故の極みをメンバー間でわかち合っているとき、いわゆる、その人の魂に触れるような体験、その人の存在を受け入れられ得た瞬間、その身の何等かの変化がある。涙がどっと溢れたり、静かに泣いたり、肩の力がすっと抜けたり、様々だが、共通していることは、人間として自分として解き放された自由や安らぎの表情である。

宗教的表現でいうところの人間解放・救い・福音であろうか。宗教的養成を受けていないメンバー間では、「私は救い主を見た」「キリストと出会った」等や、信仰（神との関係）の告白は言葉としてはない。しかし、「私はほっとした」「何か温かでとても楽な気持ちだ」等という告白表現は見られる。

エンマオでの道中で二人の青年が、復活のイエズスの姿は見えないが確かに出会ったことに気付いて発することば、『私達のうちに何か燃えるものがあの時あったではないか』という告白表現と重なる同質の霊的体験を、私達はＴグループでの濃縮集中した時空間での人間関係の中で再生しているのではないか。

それを、イエズスだからとか、神様に触れたから、等という言葉では、私達日本人の心を満たす言葉にならない。むしろ、「私は自由になった」「何か人間でいることが嬉しいような」「人と関わっていることが楽しいような」という素朴な生活感の中に、実は人の真理、神が潜んでいるのではないか。

「真理は人を自由にする」（ヨハネ８章32節）という真理が再生されているではないか。

そしてこのようなＴグループにおける神秘体験へのアプローチはなまの人間・仲間同志の世俗化を尊ぶ日本の学校教育では、実現可能な、現実的な「自己解放・人間解放・宗教性育成」に有効である。勿論、人間の霊性・宗教性・感性・知性あらゆる側面の人間性教育は、各人の個性にあうものあわないものがあろう。Ｔグループでの教育は真理との出合いと人間性の解放という意味では学問と宗教の営みに支えられた霊性教育でもある。しかし、強制でなく、関心のある者にたいして開かれることが望ましい。

人間の頭の中で描く理念の世界 must be, must do に重点をおく理念主義の教育が、今日の学校制度の主流を成している。(*) それに対して、Ｔグループを含む体験学習は、教育学説上、自然主義・経験主義であり、人間が実際に経験できる世界・人間の現実存在の世界 to be, to do に重きをおいた教育を考えようとする。

Ⅳ　Ｔグループと神学論

キリストの神学において、神の位置づけの特徴は「超越性」にあるのではないだろうか。神は「唯一・絶対」であり、全知・全能・全善の完全なる真・善・美そのものであるという。完全な、上なる、聖なる、「神」に対して、不完全な、下なる、俗なる「人間」という位置づけや階層意識は、現代人にとってもなお伝統的かつ正統的である。「超越性」という発想法を基盤とする神学は、今日までの社会構造を支える科学、学問（形而上も形而下も）、教育制度、産業構造にそのまま反映している。

神学における「神と人の位置づけ」は、人間の生活様式を左右する。

では、Ｔグループや体験学習による人間性開発（教育）において「神と人の位置づけ」はいかなるものなのか、又、広義の「神（しん）」学上の問いかけや論義の視点は何なのか。

「しん」という平仮名の音だけで意味する語を広辞苑で拾ってみる。（表１）

神　信　真　心　身　唇　紳　深　芯　臣　……核、存在、霊

申　伸　診　侵　進　新　針　審　振　震　辛　娠　振　……変化

森　慎　薪　親　浸　宸　請　寝　……安定

しんしんと降る雪、という擬態語の響きからも「しん」という音の持つ意味、もしくは言葉の持つ霊性（ことだま）が伝わる。

「しん」は、何もので、どのように触れられ、どこに落ち着くのか。

一人の人間に「しん」が内在している、という直観や人間の尊厳に対する畏敬の念なしには、Tグループという集いは主催出来ないであろう。

人のうちに神をみる　　人のうちに心をみる
人のうちに真をみる　　人のうちに信をみる
人と、神で交わる　　人と、心で交わる
人と、しんで交わる

人のうちに神をみるとは、内的関わりが生じてはじめて起こる。
人に内在する神への信頼関係は、人の尊重、人間性の自由な動き、脱制度化をもたらす。
人に外在する神への信頼関係は、戒律する神のイメージから階層制、制度化をもたらす。

宗教性や霊性は、知性・感性と共に人間性の一部として尊重され育まれるはずの、その人の大切な個性である。

しかし、「宗教」という語は、今日までは、制度や組織・戒律のイメージが濃く狭い意味の「宗教派閥の教え」として、敬遠されがちだった。それは、その人にとっての神の位置付け方が、外在的だからである。すなわち、外在した超越神との関係つくりをしていれば、疎遠になる。一方、個々人の人間性におわす内在神との信頼関係つくりをしていく者にとっては、人間性や人間関係・人生のあらゆる営みにたいして、限り無い信頼や弛まない楽観視が可能だろう。

私は、宗教教育とはいわず、宗教性教育、内面性教育、霊性教育とあえて呼ぶ理由は、超越神と内在神という発想の違いから来るコミュニケーションギャップの近年多いことを感じ、発想法の区別を明確にしておきたいためである。

日本人の間では、宗教教育を宗派教育と誤釈され、「信条の自由」という名の下に特定の宗教への傾倒を拒み、同時に、自分のしんに触れ合うという人間性教育まで拒否してしまう「教育体制」が浸透し過ぎていないだろうか。

ここでは教育や社会構造の制度化に影響を及ぼす、人間観や神観の発想法の二極として、超越神と内在神を挙げるにとどめる。

「心（しん）の時代」「霊性の時代」は、人々が「宗教」ということばを使うかどうかは別として、「しん」との関係を探る時代であろう。しんとの関わりは、自分の外や超越したところにあるのではなく、自分の内、他者の内、自分たちの内という、内在神をもつ人間観に支えられた人間関係に生ずる。人との様々な在り様の中で創生される、生きた生命的関係である。しんとの関わりは人生に出会う人々を通して生ずる。

Tグループでは、人生の一瞬一瞬の真（しん）を、グループ（人間関係）の濃縮した時間・空間の中で体験し得る。あえて、外から宗教について語るまでもなく、Tグループのメンバーの関わりが深まれば深まるほど、宗（胸・むね）の教えや内なる神（しん）に出会うのである。

Ｔグループにおいて、グループダイナミックスや先に述べた「創生される何ものかとの関わり」を体験し得る人間性を議論する場合、神の位置づけの特徴は「内在性」にあるのではないだろうか。人間に内在する神という発想法がＴグループや体験中心の学の基盤にあるのだろう。従って、超越性という発想法を基盤とする神学・科学体制・教育制度・産業構造に対しては、Ｔグループや体験学習を提供する人間関係科は、内在性という発想法を手がかりに変革を迫り得る「異文化」としての視点の整理が、今後も大切である。

それがしいては現代人間（かん）の異文化間コミュニケーションの助けともなろう。

参 考 文 献

＊神秘体験、宗教体験＊

William James 1901-02 "THE VARIETIES OF RELIGIOUS EXPERIENCE"

桝田啓三郎訳 1970 宗教的経験の諸相 上・下巻 岩波書店

湯浅泰雄 1989 宗教経験と深層真理 さみっと双書

島田裕巳 1989 フィールドとしての宗教体験 法蔵館

＊宗教心理＊

松本 滋 1979 宗教心理学 東京大学出版会

GOBLE G Frank 1970 "THE THIRD FORTH: The Psychology of Abraham Maslow" 小口忠彦約訳 1972 マズローの心理学 産業能率大学出版部

＊教育制度＊

小林公一 1963 一般の教育とキリスト教育（増訂版） 教師の友文庫

桑原直己 1988 〝宗教教育と道徳教育〟 カトリック学校と公立学校をめぐって 日本カトリック教育学会12回大会

＊Ｔグループ＊

山口真人 1989 〝Ｔグループ〟 Clinijal Psychology Vol. 2, No. 4 Dec. 人間関係研究センター

表1

人間関係トレーニング
御岳　1988.11.7〜12.

＿＿＿＿＿グループ　　T＿＿＿＿回　　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

1．今のセッションでの私を何かにたとえると

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿のようだ

2．今のセッションでのグループを形容詞であらわすと

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿，　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿，　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿，

3．今のセッションでグループに影響を与えたのは（肯定的でも否定的でも）

誰の：　　どの様な言動や態度が：　　どの様な影響を

4．今のセッションで私に影響を与えたのは（肯定的でも否定的でも）

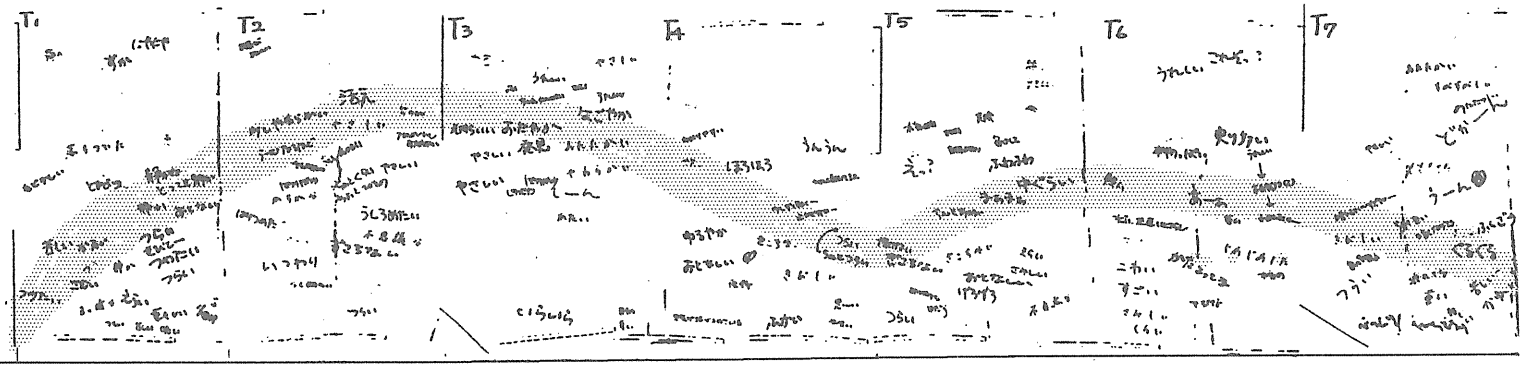
誰の：　　どの様な言動や態度が：　　どの様な影響を

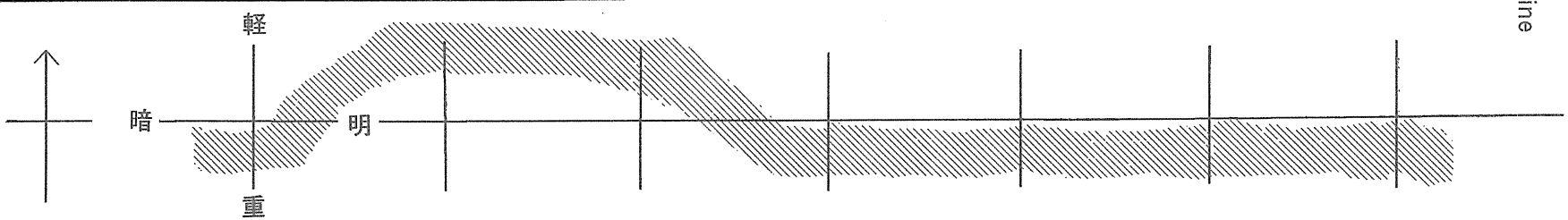
5．今このグループの中で気になる人、気になることは

（肯定的でも否定的でも自分との関係を含めて具体的に）

6．その他自由に

本人の気持ちの位置
（明 暗 軽 重）
と
グループ形容
T_1〜T_{15}
10名による





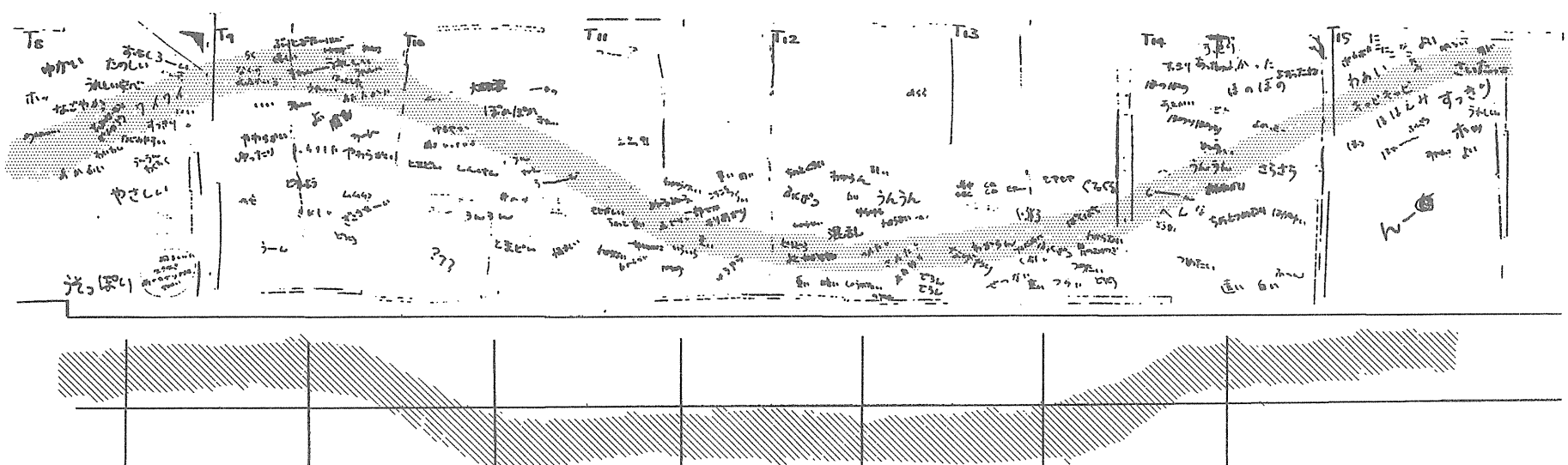


Fig. 1　Tグループの life line